

第249回くらしの植物苑観察会 2019年12月21日(土)

昭和と平成のサザンカ

箱田 直紀(恵泉女学園大学名誉教授 日本ツバキ協会会長)

花を楽しむサザンカの歴史

九州や四国などに自生するサザンカはヤブツバキと同様に種子から油を搾るために利用されてきたが、花が観賞されるようになったのは江戸時代初期からである。1700年頃までには、各地で様々な園芸品種が生まれるが、花の色や花形変異の拡大にはサザンカとヤブツバキとの自然交雑が基になったと考えられている。

江戸時代後半には江戸の染井を中心に新しい園芸品種が加えられ、さらに関西や九州などでも苗木の生産や普及が進み、この時期の品種の多くが現代に引き継がれることになった。



サザンカ自生種の花

昭和初期のサザンカ

昭和初期には西洋渡来の花々の人気に押されて、サザンカやツバキ苗の生産はほとんど行われなかったが、これを憂えた石井勇義らの努力により、園芸雑誌や図譜を通して当時の貴重品種の解説や記録が残された。また1940年頃から第二次大戦へかけての園芸界の暗黒時代には、皆川治助や石井らの努力によって江戸・明治期から引き継がれた多くの園芸品種が保全された。

戦後の園芸ブームの中でのサザンカ

1940年代に始まる世界的なツバキブームの影響を受けて、1950年代から日本でもツバキやサザンカの品種が見直され、苗の生産も再開された。しかし、この頃までの品種の多くは古くからの一重や半八重咲きで、開花の時期は晩秋から初冬であった。

八重咲きサザンカの誕生と普及

1960年頃から関西の宝塚市や池田市等の植木産地から、八重や千重咲き、獅子咲きなどの華やかな品種が次々と発表され、苗木生産の中心が九州の久留米市に引き継がれながら重弁花が全国に広まっていった。これら重弁花の多くは冬咲きの「獅子頭」(下図右)の遺伝子を引き継ぐものや、ツバキとサザンカの自然交雑と考えられるハルサザンカの後代であったために冬咲きのものが多い。そのため、サザンカは「冬の華」としてのイメージが強調されるようになった。



乙女サザンカ(1965年頃)



東牡丹(1989年頃)



獅子頭(江戸時代後期)

海外からサザンカの里帰り

昭和初期からヨーロッパや米国、オーストラリア、ニュージーランドなどに渡った日本生まれのサザンカを基に、実生や枝変わりから数々の華やかな重弁品種が育成された。1960年代後半から日本にも里帰りしてサザンカにさらに華やかさを加えるようになった（下図）。

また、中国では1980年代から冬咲きのサザンカが公園樹や街路樹として注目されるようになり、さらにヨーロッパ各地でも近年は冬咲きのサザンカが注目されるようになってきた。



LUCINDA (豪州)



BEATRICE EMILY (豪州)



CHANSONETTE (米国)

サザンカの新しい品種と栽培の現状

熊本市には江戸末期に始まる「肥後さざんか」と呼ばれる一群の品種があり、1960年頃から毎年11月に展示会が開催されてきたが、1999年からはさらに新品种が追加登録された（下図）。



深山の雪 (1999年登録)



乙女の舞 (1999年登録)



微笑／ほほえみ (1999年登録)

しかし、サザンカ品種の発祥地である日本では、1980～90年代をピークに栽培熱が徐々に低下し、苗木の生産も下降線をたどりつつある。

いっぽう、1990年前後から増殖された品種の多くは、ぐんまフラワーパーク、歴博くらしの植物苑、小石川植物園、神代植物公園、亀戸中央公園、東京都大島公園、浜松市フラワーパーク、久留米市つばき園など各地の公園や植物園に保存のために植栽され、また熊本市においても肥後さざんかの普及活動や次世代への品種の継承などが議論されるようになってきた。

.....

次回予告 第250回くらしの植物苑観察会 令和2年1月25日(土)

「くらしの中に生きる植物一和の香辛料」天野 誠 (千葉県立中央博物館)

13:30～15:30 (予定) 苑内休憩所集合 申込不要